
天使憑き

夢籠真琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使憑き

【Zコード】

Z6437Z

【作者名】

夢籐真琴

【あらすじ】

一般人を自負する零

毎日平和に暮らしていたのに
天使に殺されてしまった

理不尽な状況にも負けずに頑張っていたが
迫り来る常識を無視した毎日

神・・・?無神論者ですけど?
天使・・・?悪魔の間違いじゃないか?

お前に頼るつもりはない
ついでにお前に協力する気はない
でもお前が本気で望むなら手は貸す

人間オバケと呼ばれる

男と綺麗な？（惡々しい）天使（迷惑な）を巡る

非日常の毎日

彼がその異変に気づいたのは
高校からの帰り道であった

何かが変だつた

いつもの帰り道

いつもの自宅への登り坂

「な・・・・！」

音が聴こえない

匂いがしない

視界ははつきりしない

いや見ているものがまるでテレビを通して
見ているような感覚

そして手足は自分の思いとは反対に
止まらない

歩き続ける

右から車が

急ブレーキをかけられる

しかし車は急に止まれない

体は宙を浮いて壁にぶつけられた

痛みを感じない

車から男の人が降りてくる

何か言つている

しかし聴こえない

口を見ていると

「だ・い・じ・ょ・う・ぶ・か」

大丈夫か？

いいや、大丈夫ではない
身体からは大量の血が

「ああ、死ぬのか

意外に早かったなあ」

意識が遠くなる

自分が悪いのにこの人に迷惑をかけてしまったな

薄していく意識の中

相手のことを考えている自分がおかしかった

毎日疲れてた

一眠りするか

彼は自分が死ぬのに未練を感じなかつた

そして眼をとじた

野次馬が集まつてゐるところを

遠くから見つめている者がいた

それは閑静な住宅街とは遠く離れた

学校の屋上だつた

フェンス越しに見ていたが

やがて興味をなくしたのか

紅い服をひるがえして

校舎の中に帰つていつた

天使との出会い？

彼は目が覚めた
寝かされていた
助かったのか・・・?
そう思いながら天井を見上げてみると
病院にしては天井が高かつた
ここは何処だ?
そう考えながら
まず上半身をしていてみた
体が動く
その事を確認するとなんだか嬉しかった
体が自由ということはいいことだとしみじみ思つた
彼は立つて周りを見渡してみた
そこは驚くことこゝわゆる

神殿

と呼ばれる場所だとわかつた
神々しい感じがした
「やっぱり死んだのか」
そう思い見惚れないと
「うお！？」
後ろに女の子が立つていて
同級生ぐらいだろうか
顔立ちは整つており
一般には可愛いと言われるであろう
これが天使だらうか
そう考えた途端

「おめでと～」

いきなり少女（天使？）が声をかけてきた

「君は千万人の一の確率に抽選であたりました～～～

妙に嬉しそうな声でいきなり言われたので

頭がついてもいかなかつた

「何に？」

ごくごく普通な

そしてまともな

当然の疑問を天使にぶつけてみた

天使との出会い？

その疑問に彼女は絶望的な答えを返してきた
「君、宮西零君を生き返らすことにしてたよ～」

「ここまでまだまともだつた

生き返らすことは絶望的ではない

問題はこのあとの彼女の言葉だ

「私が零君を殺したんだ～」

・・・ 聞き間違えか？

この子が僕を殺したのか

「だからって悲觀しないでね～私がもう一度
現世にしていてあげるから～」

殴り倒してもいいだろうか？

温厚な性格だと自負しているけど

そこまで勝手に殺されたくない

ついでに殺されてすぐに生き返りたくもない

「じゃあ一緒に現世に戻ろ～」

ちょっと待て

手を挙げてみる

「はい、宮西零君」

こいつは教師か

「君は誰？ここは何処？現世に戻るってどうせいつって
我ながら簡潔に3つに絞つて質問できた

その答えは

「え～と一つ目からいくね

私はドロシア ドロシーって呼んでね

2つ目はここはいわゆる天の国ね

3つ目は魔法で帰るわ

なるほど

つて納得できるか

「ああ、忘れてた 零」

いきなり呼び捨てですか・・・
「眼と鼻と耳 どれがいい?」

「じゃあ眼で」

何となく答えてしまった

「さすが零君 見込んだだけのことはあるわ」

意味を問おうとした途端

何かに吸い込まれていった

目が覚めた

ここは何処だ？

ベットの上？病院か？

夢を見ていたのだろうか？

それにしてははつきりしていた夢だつた

隣には生命維持装置だろうか？それらしき物が置いてあつた
体は動かせそのうので立つてみる
意外にも痛さを感じない
後遺症というものもないらしい
ありがたいことだと感じながら
ゆっくりと歩いてみた

大丈夫そうだ

ふと後ろに気配を感じて振り返る
するとそこには

あの天使がいた

「元気そうだね」

お前が殺したんだろ

ていうか夢じやなかつたのか

再びの絶望感

「顔がこわばつてるよ」

女だからつて手加減しなくてもいいよな

そもそもこいつ天使だし

「どう？再び下界に戻つてきた感想は？」

下界じゃなくて現世か　君達には

「夢じやなかつたのか・・・」

無駄とわかつていても言つてしまつた

「あまり時間がないから要点だけ言つよ

君、宮西零は28時間前に交通事故にあって意識がない重体になつてゐる

ここで君が目を覚ました

多少めんどくさいけど精密検査がある

それが終わつて退院したらまた来るよ

一度と来るな・・・

殴りかかろうとしたとたん

後ろの扉が開いた

「まあ目が覚めたの！？」

じつとしてないと駄目よ

今先生呼びますね

年配のベテランらしい看護師が声をかけてきた

そしてもう一言

「あら、窓が開いてるじゃない
あなたが開けたの？」

ここは10階なのだから落ちたらあぶないから開けては駄目よ

・・・言葉がない

天使なら魔法で帰れよ

そうつぶやいた彼には絶望感しかなかつた

天使が帰つてから零は忙しかつた
別に精密検査はいい
医者の仕事だしやるしかないだろう
親もきて色々言われたがしようがない
自分が悪い
自業自得だ
いや、そもそもあの天使が僕を殺したのならあいつが悪い
また一つ彼女を殴る理由ができた
しかしこまだここまで良かつた
ここからが問題だつた
医者と警察から事情聴取をやらされた
ここまではまだ許せる
しかしこのあと聞かれたことは
「君はなぜ自殺をしようとしたのだい？」
驚愕的だつた
その言葉はあの忌々しい天使並みに
零を絶望の底に落とした
病室で窓を開けていたのと
フラフラと歩いていたのを
僕が自殺をするのではないかと疑つていたのだ
カウンセラーの人も来たし
カウンセリングもさせられた
ベットに10日間も座らせられて
常に誰かの監視があつた
これにはさすがに閉口した
ふと学校のことを思い出してみた
そういうや結構学校に行つていらないな
と思つた瞬間

「・・・もう、夏休みか」

宿題はどうするんだ

悶々と自問自答していた

それを見た監視の人が医者を呼んで来て

またカウンセリングを受ける羽目になった

「もうどうにでもなれ」

開き直った零だった

零が解放されたのは夏休みが半分ほど過ぎた頃だった

とうとう警察も医者も零の態度をみて諦めたようだつた

カウンセリングも零が自暴自棄になつたので変な結果になつてゐるだう

零が解放されて家に帰つて自分の部屋に入ると眼の前に忌々しい天使が椅子に座つていた

「おかえり～お疲れ様」

零は天使に向かつて飛びかかつた

もちろん手はグーで

「ちょっと、なにするのよ　女の子に攻撃するなんて」

「てめえは天使だろ」

問答無用で殴りかかると
いや、かかろうとすると

天使が消えた

「無駄よ　あなたが私を攻撃することはできないわ」

眼の前にまた天使が立つていて

するとあきれたよう

「もしかしてあなた気づいてないの？」

「何を？」

諦められず隙あれば攻撃しようとしたまま問いかける

「あなたの鏡見ないの？見なさいよ」

何かいやな予感がした

急いで机の上にあつた鏡で顔を見てみると

「つお！？」

眼が白銀というのだろうか

光沢のある何色にも染まらないような
綺麗な銀色になっていた

「もしかして・・・」

身に覚えなら山ほどある

天界から帰る時に天使に聞かれた言葉

「眼か鼻か耳かどれがいい?」

あれが原因か・・・

げんなりとしている

「あなた本当に気づかなかつたの?」

前に会つたとき真夜中で電気がついていなかつたのに顔見

えたでしょ?

それはあなたの白銀の眼のおかげよ

ちなみにそれも私のおかげだから感謝してよね

折角さつきまで抑えてきた殺氣が再び燃える

「何をしたーーー天使」

再び殴りかかつた

天使の事情？

零の不意打ちによつていい勝負が出来た

―― 40分後――――――――――――――

人間の域を超えた体力を持つ零が体力がなくなり諦めたとき

「あなた、人間じゃないわね」

「大体お前も天使だろうが」

「あなたねえ いい加減私を名前で呼びなさい

よ 私はドロシア、ドロシーでいいって言つてるでしょ？ なんで

天使なの？」

「忘れてた」

ドロシーは肩を落とした

天使といえど疲れを感じるようだ

「聞きたいことがあるけどいいか？」

零は疑問に思つていたことを聞いた

「なんで俺を殺したんだ？」

「ここから始まる天使」^{ドロシー}の解説に零も肩を落とした

「天界にはたまに下界（現世）に必要がある時があるのよ
そこであなた達みたいな人間離れしている

オバケに用を頼むのよ

もちろんただ働きではないわよ 報酬はてるわ

でもいくら人間離れしたオバケでもできることとできないことがあるわ

そこであなた達には

白銀

の称号を与えるのよ

白銀の称号を与えるとその部分あなたの場合は眼 そこが天使

との同調するようになる

同調するとあなたの最大限の力が發揮できるようになるわ
あなた達を補佐する役割及び天界からの伝言を伝えるのが私たち天
使なのよ
わかつた?」

天使の事情？

「理由はわかった 具体的な天界からの要件はどんなのなんだ？」

「そうね、基本的にあまり難しいのはないわよ 安心してね」

「いやお前に殺された時点で安心とかいえないと思うが・・・」

「もう一つ、白銀の眼はどういうことができるんだ？」

「そうね～例えば壁の向こう側の人間の行動がわかるとか、遠くのものが見えるとか、危険時のみれけどものがゆっくり動いているよう見えるとか あくまでも危険時のみだけね 後は物に毒が入っているとか その物の材質がなになのかとか」

「なるほど結構高性能なんだな ちなみに同調を詳しくおしえてくれ」

「あなた、こんなこと聞いても驚かないのね
神経がないんじゃない？」

「お前に殺されて生き帰った時点で神経もへったくれもない」

「にべもない言い方ねえ 同調はね～あなたが危険になった時に

私にわかるとか あと下界では携帯っていうの？」

あれと同じように通信ができるわよ

あなたの見ている世界は私にもわかる
文字通りあなたと私をつなぐのよ

「おまえさつき難しくないって言つたよな？」

れつから

—————危険—————

つていう単語連発してないか？」

「そ、そんなことはないわよ

こいつ一瞬焦つたな

天使の事情？

「おまえ、今『まかしたな』
「何のこと？」
「もう一発殴るうか？」
「わかつた言うよ言います」
「それでいい」
「あんたすごい偉そうね」
「時と場合による」
ため息をついたドロシーは説明し始めた
「確かに基本的には危険はないわよ
でもね前にあつたことなんだけど
通り魔事件があつたのよ
それで理由は言えないけど天界のお偉い方が
その犯人を捕まえるように白銀の称号を持つている人に頼んだのよ
でもその犯人がとても強くて
本来私たちに白銀の称号をもらう域の人だつたから苦戦したわけ
結局、その人の相棒の天使がきて助かったのよ
これでよろ
しいでしょうか？零様？」
「ああ、下がつて良いぞ」
「御意」

いつのまにか王と臣下の対談になつて
いた

「それで、俺はどうやって暮らすんだ？」
「今まで通りでいいわよ
あなたたちは特に口頃はすることはないわ
だからいつも通り学校に行つて
帰つて来るだけでいいわ
特にすることがないわけか
それなら滅多に呼び出されることもなさそうだ

「 しょうがない、選ばれたんだから付き合つてやるよ
ドロシーはホッとした顔で爆弾を投げつけた
「 これから私はここに住むわね」

天使と同居！？

零は妹との二人ぐらしだ

別に両親は他界したとかではなくちゃんと生きている
前に入院した時もちゃんと見舞いにきた

しかし父が外国中を飛び回っているので

それに付き添う形で母も一緒に飛び回つて
結果妹との二人ぐらしになつている

父は典型的な仕事人間で

滅多 ていうか2年はあつていい
だがそのおかげで妹と二人で生きていいけるだけのお金も貯つていて
それを知つていた天使は同居しようと言つたらしく
「何でよくいいじゃない同居ぐらい 」つちだつて泊まるとお金が
いるんだよ

部屋も多いし広いし問題なしでしょ

「妹がいるだろ？が

「妹さんには見つからないようにするから

「お前は信用できん

「やだーなにそれ 仮にも私たちは同調できる相棒なのよ 仲良く
しましようよ」

「気持ち悪い言い方するな

「こんな美人を捕まえていてあなたは何を言つてるのよ？」

「自分で言つな

「でも美人でしょ？」

「う・・・」

確かに美人だろ？

顔立ちは整つていて

しかしこいつは天使だ

人を殺しておいて同居しようなんてよくそんな口がたたける

一階から上がつてくる妹が見えた

もちろんドアは閉じている

白銀の眼を使って見ているのだ

「おい、天使隠れろ」

天使は妹が来たのをわかっているにもかかわらず隠れようとしない

「天使！」

声をあげたが動く気配がない

「私はドロシーよ」

な——

「兄貴、入るよ」

天使と同居！？？

渚（俺の妹）が部屋に入つてきて見たのは当然のように俺と綺麗な天使だった

「冗談、その銀の眼だつたの？」

一
な
一
一

なぜこの眼が見えるんだ

ドロシーに聞こ語ぬる

「おい、天使 なんでこいつが俺の眼が見えるんだよ？ 一般人は見えないはずじゃ ないのかよ？」

言をしてきた

「はあ？」

「だから彼女はこっち側の人間

かわいそうなことに零の影響が知らないけど彼女は私たちと組めるだけの実力を持っている

たたの守られるだけの子猫ちゃんじゃないのよ」「顎が落ちそうだつた

いやはずれた

あなたたちみたいなオバケを助ける役割があるのよ

「銀の称号を持つではないのだけれど、少なくとも相当強いはずよ」

あなたは・・・剣を使えるわね?「

これに答えたのは予想外の展開にもついてきている渚だった
「私は渚です はい剣道をやっています

綺麗な天使さん？」

「ドロシア、ドロシーでいいわよ

零の妹だけあつてさすがにすごい神経してるわね
普通の人はこんな時驚いてめんどくさいのに

さすがこの兄にしてこの妹ね」

「私は普通の人間ではない力はあることを知っていました
だから剣道をしました

兄貴に天使さんがついても

特に驚きません」

「ねえ 突然話変わるけどこの家に同居させてもうえないかしら
？渚」

「いいですよ、ドロシーさんみたいな綺麗な人・・・じゃない天使
さんは大歓迎です

兄貴女性に感心示しませんから」

女二人（天使一人か？）で盛り上がりしている

ドロシーは嫣然と笑いながら

「わかつたわ 任せなさい」

零は匙を投げた

天井どころではなく

宇宙に届くまでの勢いで投げつけた

天使と同居！？

結局、2人の説得（強引な）に負けて
ドロシーは同居することになった
2階は現在僕と妹が使っていたが
まだまだ部屋が余っていたので

その部屋の一つを提供する事になった
僕は押入れか物置にでも

放り込んでやろうかと思っていたのだが

渚の猛反対と

天使の女性をそんな所に放り込んでおくなんて（だからお前は天使
だろ）と主張し

2階の隅の部屋がドロシーの部屋になった

この際だからお前は女性なのかと聞いてみると

「もちろん、この体をみて女性に見えないなら眼科と神経科に放り
込むわよ」

「なんでそこに神経科が出てくるんだよ・・・」

案の定厳しい返事が

「あなたの神経がくるつてるからに決まってるじゃない」

「お前、さつきの事に根に持つてるな・・・」

「あたりまえでしょ

私は神聖な天使よ

その神聖な天使を物置に放り込むなんて

ひどい・・・」

泣く真似をし始めた

そこにどこから出てきたのか渚が

「兄貴、サイテー

女性を泣かせるなんてサイテーよ」

最近はすっかりこいつまで天使の味方になつて

こっちを一人がかりで攻撃してくる
天使一体と人間に

一般人である自分がかなうわけもなく・・・
いや、今更自分を一般人呼^{オバケ}ばわりするつもりはないが

勝てるはずがない

天使と同居？

天使と同居してはや一週間がたつ
幸い学校もまだ始まつていいので
家でのんびりとすることができた
これは事故（天使が殺した）のよつて宿題がほとんどないからだ
初めて天使に感謝できることが見つかった
それにしても、天使と同居したのに
特に変わることがない

我ながら、環境適応能力が発達しておると思う
僕は無神論者だが（すでに天使に会つた時点で神様はいるんだなあ
）と思ったが）神様にこれまた初めて感謝をした
その理由は妹に僕の血は流れていないことだ
初めは同居を進めていたのに、いざ始まるとなると気になつて仕方
がないようだ

それはそれとして
閑話休題

僕が天使と会つて劇的に変わつたのは
もちろん、白銀の眼だ

しかし、この眼ははじめは厄介な代物だつた
なにしろ入つてくる情報量が半端じゃない
何かを見るだけでその材質、質量などが一発でわかるからだ
ちなみに眼は両眼とも白銀の色をしているが
情報が入つてくるのは、右眼だけだ
両眼に入つてきたら、どうしようも無い
ついでに視野も広くつたようだ

ようだ、ではなくて確實に広くなつた
極端な話360。見えるようになつた

しかし慣れてくると面白いもので

周りにぶつかる危険性がない

それに結構面白い

天使曰く、

「あなたほど早く白銀の称号を慣れて
いつのまにか遊んでいるような人オバケはいないはずよ」

と呆れていた

天使の実態

天使が好きで嫌いなものは一体何だろうか？

これはもちろん天使に仕返しするためだ

退院して家に帰るより先に

そのために町外れにある図書館に行つてみた
町には大きな図書館がもちろんある

しかしながらわざわざ町外れにある

図書館に行つた訳は

そこはおそらく個人経営でお婆ちゃんが一人だけでやっていたのだ
そのお婆ちゃんが魔女のように見えたからだ
天使もいるのだから、魔女もいるだろうと

強引な考え方をして

失礼を百も承知で体を透視
スキヤン

させてもらつたが一般人だつた

そのお婆ちゃんとは結構親しかつたので
安心をした

ところで、天使が好きなものはわかつた

ある日の夜

天使が居間に降りてきた

それを白銀の眼アイ

感じ取つた僕は

渚を置いたまま隣の部屋に避難する

それをみた渚も人間離れした脚力で同じように逃げた（渚は白銀の
眼を知つている）

しかし間一髪のところで天使は渚を見つけた

「あら、渚ちゃんどこいくのかなあ～？」

猫なで声というのだろうか？

物凄い甘い声で背中に鳥肌が立つような声だった

「あ、ああ、ドロシーさん こっちには兄貴もいますよ
密告しやがった

いやこの場合密告ではないが

「てめえ兄を売りやがったな

「だつて～」

「じゃあ2人でしましちゃうよ～」

前にもまして甘い声

体が震える

渚も同じく・・・

天使が盛んに（半強引的に）誘っているのは
市販のテレビゲームだった

数日前に話を戻す

「ねえ これ何なの？」

「テレビゲーム 天界にはゲームはないのか？」

「へえ～ゲームする機械なの

天界にはないわね

人間もたまにはいいのを作るのね
テレビゲームに興味を示したので

渚が使い方を教えると

すぐくはまつてしまつたのだ

徹夜で付き合わされたこともある

話を現代に戻す

戦慄した僕ら兄妹にゲーム機を渡して

早速始めてしまった

「俺は宿題があるから」

「あなた、宿題ないでしょ」

「う・・・」

「私は片付けがありますので・・・」

「あら、何のこと?」

キッチンを見てみると何時の間にか片付いている

魔法を使いやがった

「う・・・」

絶句した兄妹を横目で見ながら

「今日はなにしようか?」

これまた可愛い声で言った

家にはなかつたはずのゲームが積み上げられている

魔法で取り寄せたゲームを物色しだした

（～誰か天使が嫌いな物を教えてくれ～）

非日常の始まり

天使に無理矢理ゲームに付き合わされた夏休みは終わり新学期が始まつた

僕&渚はゲームから開放される喜び半分と新学期が始まる憂鬱感があつた

夏休みあけ特有のダラダラ感もあつた

そんなある日、

数学の授業中に通信^{テレパシー}が入つた

もちろん相手は麗しき（面倒な）天使だ

通信は頭で考えたことが相手に伝わる

初めは慣れなかつたが最近は色々と便利に使つてている

「零、至急屋上へきて」

もちろん声は周りには聞こえない

時計を見てみる

あと30分は授業だ

「この時間が終わつてからでいいか？」

ところが無情にも天使は

「あなた、至急の意味がわからないの？早くきて」

声が珍しく切羽詰まつていたので

「わかつた、今からそつちに向かう」

「急いでね」

「ほいよ」

さて、返事をしたのはいいが

この状態をどうやって脱出するのか

ちょっとと考えてから

「先生、ちょっと用事思い出したので出でます」

教師と同級生がポカンとしているところを

そのまま有無を言わさず廊下に向かいダッシュで階段を駆け上がつた

声に緊迫感があつた

それと共に零は不吉な予感をしていた

第六感というのだろうか

こういう感覺を無視するところがない

一応屋上を眼を使って見てみると特に以上は感じられない

一気に駆け上がりドアの前に立つた

そして、ドアを開けてみると

そこには、3人がいた

同級生くらいの男と

ドロシーは可愛い顔だが

その天使は（おそらく）、端整な顔立ちをしていた

もちろんもう一人はドロシーだ

白銀の眼には映らなかつた人が（天使？）いた

その様子を山の頂上から見ていた者がいた
決して近くはないその山の頂上で
静かに学校を見ていた
紅い眼を光らせて・・・

非日常の始まり（後書き）

新シリーズ突入

紅い人がついに出てきました
あとコメント、感想お待ちしております
それと天使の苦手な物も教えてください
小説に乗るかもしれません
是非コメント寄せてください

非日常の始まり？

天使に呼ばれて屋上にきた零が見たのは
透視^{スキャン}で映らないはずのない

2人の姿だった

いやよく見てみると耳が銀色にひかっている
白銀の称号だ

「なるほど・・・」

口の中が乾いている

絞り出すような声が出た

男の方は真面目そうな人間だ

天使の方は冷たそうにさえ感じられる

「零です、よろしく」

少しだけだが2人の表情が変わったような気がした

「よろしく中森秋人だ

ちなみに君より一年上だ」

「よろしくサミだ」

素つ気なく言われた

いやそんな気がしてたけど

「あなた、相変わらず強心臓というのか

鈍感というのか

慌てないで自分から名乗り出るなんて

とドロシー

「だから、お前に殺された時点で常識は捨てたよ

「ひどいわね」

「どつちがだ、人のことをオバケだ 鈍感だ言つてゐくせに」

「事実でしょ

「さすがだ・・・」

サミが俺たちの喧嘩になりそうな空気に入ってきた

高貴な声というのか

これが神様だといわれたならば
何も疑いを抱かなそうだ

「ドロシーが手を焼いているというからジのようないふな人間かと思つて
いたが
さすがだな

零か

名を覚えておこう」

秋人さんも

「面白いやつだな

楽しめそうだ」

物騒な笑いをしながら言つた

一応一般人を自負している（天使に対しては言葉が荒いが）零はため息をついた

どうやら彼以外まともな人間ではなさそうだ

零は気づいていないが彼自身も他からみると相当変わつてゐるが・・

・
どうやら自分は彼らと協力をしないといけないらしい

早くも人生を悟つた零であつた

暗闇の中で紅い眼を光らせて
楽しげに笑つていた

「面白いやつだ」

口述との繋がり（前書き）

今回ばかりはと詮めです
少し間隔があいてしまいました
すみません――

口常との戻れ

二人に協力することが決定事項になってしまった零はげんなりと肩をおとしていた

それに構わず固いイメージを持っていた秋人とドロシーが仲良くしやべっていた

「それにして、こいつなかなかの器持つているな～」

「サミも認めたからね」

「あのサミが認めるのは滅多にない・・・いや見たことないもんな

「確かにね」

そこに乱入してきたサミが

「秋人は最初なにも言えなかつたからな

「いやいやサミさん、まずあの状況でまともな状態でいられませんよ」

なぜ敬語？

「零は割とまともだつたよね
軽口たたいてたし」

いや、よく覚えていないが

「そうなの　お前やるねえ

後輩なのに若干尊敬

これから俺に対しては敬語いらないよ

「ありがとうござります」

意外に軽い人なのか？

そんなことよりも聞かなくてはいけないことがあった

「ちなみに俺つて何で呼ばれたの？」

「紹介するためだけ」

「お前もしかしてそれだけとか言わないよな

ドロシーちゃん？」

満面の笑顔で問いかける

秋人、ドロシー、サミでさえ顔がこわばっている

「そのために授業を抜け出さなければいけなかつたわけはないよな

エロジー

今度は若干声が低くなる

「口ジニは顔が蒼くなつてゐる

「アーティスト」

大声で叫び攻撃にする

トロジーも承知のうえで先は逃げている

授業を大切にしている

授業を抜け出すなんて言語道断だ

祖國の風が待つてゐる

ていた

「次生毛器の側の本」はうり

それをみたか三

「ドロシーがオバケと言つた理由がわかるな

身体能力が半端ではなし

卷之二

あいつは本当の人にじゃないかもしれないな

零がドロシーを抑えつけようとしている

「これだけ見てれば美男子と美女

樂しい画なのには何が 甘美なる

「お前に何を期待している?」

「何でもないです

そういうや何で魔法使わないとんたう?

魔法を使つたら零はかなわないはずでしょ?」

その疑問には零も耳を傾けた

「それは無理

天使と同調した人は天使の魔法にはかからない

「かかるつて・・・媚薬みたいじやん

じゃあ攻撃の仕方は?」

「無論殴り合い」

「原始的な方法ですね

ちなみに天使は疲れたり、傷ついたりするんですか?」

「一応するが人間程体力消費は早くない」

「なるほど」

2人和やか(?)に話しているのを聞き

「いい事聞いたなあ～ドロシーさん?」

秋人もサミも零の周りの気温が下がった気がした
いつのまにか零はドロシーに馬乗り状態になつて
いる

「ちょ、零　　女の子を殴つてはダメよ

サミさんも余計なことを言つてないで助けてくださいよ～

「お前は女か!」

「そうよ、私はか弱い女の子よ!」

「か弱いは取り消せ!」

秋人&サミは内心

そこか　　と突っ込んでいた

「あなた一回眼科行きなさいって言つてるでしょ

それと押し倒すのは他の女の子にしなさい

「お前以外にやつたら犯罪者じゃねえか

眼科も行つた

この白銀の眼でも問題なしだとよ

「それなら神経外科は?」

馬乗りの体勢で猛烈な口喧嘩をしているところに口を挟んできたの

は秋人だつた

「お一人さん 仲がいいのはいいんですが

そろそろ今の状況を考えてくださいよ」

零とドロシーに睨まれて逃げ腰になつた秋人だが逃げなかつた
今の一人に睨まれて逃げなかつたのは

表彰ものだ

顔を引きつらせながらも

「今授業中ですよ

周りの迷惑を考えてくださいよ」

『忘れてた』

秋人は妙なところでハモつた2人を見て

苦笑をしていた

そして白銀の耳を使って教師が上がってきたのを探知した秋人を先
頭に各自校舎を逃げ回つた4人であつた

番外編～逃走中～秋人&サミの場合

秋人が聞こえた通りちょうど屋上から降りたところに教師たちがきた
幸い顔は逆を向いていたので見られてなかつたが追いかけてきたの
で当然のように逃げた

秋人の場合

「何で俺まで逃げなきゃいけないんだよ～」

「あなたが原因でしきうが

あんな大声出して」

「元はといえばお前だろ」

「こいつら逃げてる最中まで喧嘩してやがる

俺はもちろんこの学校の生徒ではないので制服が微妙に違う
一応学生の中だから目立ちにくいだろうと思いつ制服をきてきた
ちなみに授業中に忍び込んだので生徒や教師には見つかなかつた

「おー一人さん、今は逃走中ですよ

いいかげん喧嘩はやめなさい」

とは言つたもののこの2人は見ていておもしろい
今まで見たことのない2人だ

大物だらうな

結構俺は真面目にとられることが多いが

面白いことが好きだ

特にこんなふうに校舎で鬼ごっこも嫌いではない

「ここから別れて逃げよう」

階段と廊下が多数あるところで

零の言った通り分散して逃げる
それぞれが別れて逃げた

とりあえず階段を降りたが

降りた瞬間に横から教師が出てきた
内心うんざりしながら逃げる

しかし行くとこ行くとこに出てくる

なにしてるんだ
ここはこの学校の教師は授業中に
そんな暇なのか

そんな悪態をつきつつ一階に急ぐ

しかしそく考えてみれば授業中でも他の学校の生徒が乱入したら捕まえに行くのは普通か

そんなどうでもいいことを考えながら逃げる、逃げる、逃げる
校舎の中の地図はさつきサミさんに通信してもらつたからわかるが
それにも、この学校は迷路か
広すぎるだろ

予想外の広さに戸惑いはあるが
とにかく逃げ切らなくてはいけない

一階についた途端窓を開けて外に飛び出る

この学校はフェンスも高いのでそこをよじ登るわけもいかない
残る手段としては校門から堂々と出る…だが…
それは流石にまずいよな

と思いつつ脱出の方法を考える

幸い今は追われてないので校舎裏に隠れて

相棒に連絡をつける

通信で自分の連絡先を伝えておく

「サミさん、どうしますかね？」

サミの場合

階段を上に上がる

「なんで私がこんなことを」

咳きながら追つてから逃げる

こんな茶番劇に付き合ふう気はさらさらないが
衆人環視の中で魔法を使うわけにはいかない
最悪の場合記憶をいじればいいのだが

それは魔法ではいけないことのトップであり
タブーでもある

それには人の記憶をいじるのは気持ちのいいものではない
人の記憶とはいうものもあれば嫌な物もある
記憶をいじるのはその中に入つて作業をしなくてはいけない
そんな気持ちの悪いものをしてたくない
というのがサミの本音である

基本そうだろうが・・・

それはともかく逃げるところに人が出でくる
そろそろ面倒臭くなつてきたところ

「サミさん、校舎裏で待機中、指示頼む」

どうやら自分の相棒は逃げ切れたようだ

それなら自分も行動のうつる

「邪魔する奴を排除するぞ」

「了解」校門で集合ね

こんな曖昧な表現でも察してくれる相棒に
密かに笑う

いい相棒に出会えたと思う

そして後ろからくる者を角を利用して足で蹴り飛ばす

端整な顔立ちで無表情のまま人の顔を蹴り飛ばす天使も大変画になる

目の保養に最適だ

しかしそんなこともお構いなしで一気に階段を駆け降りて
校門にいる相棒の元へ向かう
どうやら全員片付けたらしい
口から泡を吹いている

「サミさん、終わったよ~」

飄々といとも簡単そうに言つ

顔を晒さずに5人も倒すのは楽ではないだろうに
零も面白いが秋人も面白いと

密かに思った

顔には出さなかつたが

「上等だ」

「そういえばあいつら大丈夫ですかね~?」

「元々あの2人が原因だ

自業自得だ」

「相変わらず冷たいね~」

「冷たい・・・か

「帰るぞ」

「待つてくださいよ~」

その声を聞き流し学校を出た

番外編～逃走中～ドロシー & リーの場合（前書き）

小説に情報変えてみました
興味のある人は見てください

番外編～逃走中～ドロシー&零の場合

ドロシーの場合

零が別れるように指示したところでみんな別れて走る
私はそのまま真っ直ぐ走った

「これって地味に損な役割じゃないの？」

眩いた通り半分以上の人間がこっちに向かつて走つてくる
ドロシーは人間の女子にしては速いスピードで走つている

（速く走つてもいいのだけどあとあと面倒よね）

とか思いつつ結構なスピードで走つている

疲れこそしないが結構な数の人間がこの学校にいることはわかつた
それだけに魔法で人のいないところを探して走つてはいるがそれも
限界に近づいていた

（人多すぎでしょ！？）

どこに逃げても人・人・人

キリがない

（やばいわ　囮まる）

後ろは離しているが前には人がいる
ちょうどそこにあつたトイレに駆け込む

何とかばれないよう济んだようだ

そのドロシーの格好はちゃんとこの学校の制服を着ていて
これも魔法だ

天使は基本的に服は自由に変えられる
ドロシーはお洒落が好きなので

服をいろいろ変えているが

サミのようないに服装に無頓着な天使は

毎日同じような人間界でおかしくないような服装をしている

今日もサミは私服？だった

(さて、ここからどうしようかしら?)

そう考へていた時

キーンコーンカーンコーン

と無機質なチャイムの音が鳴り響いた

(授業終わったのね)

そんなことをぼんやりと考えているとトイレに人が入ってくる気配がした

(マズイ)

すぐさま個室に入った

そこにそこそこ可愛いと思われる女子3人組が入ってきた

「ねえ～ そういうや富西君どうしたのかな～？」

「あ～ そういうやどつかいたね」

「奈美は富西君好きだもんねえ～」

「でも全然女子に興味ないんだよ～ 私が話しかけても基本無表情だし」

「かっこいいけどねえ～ クールつていうか」

「全然動じないんだよねえ 私が誘惑紛いのことしても『お前なにしてんだ?』だし」

「美夏ちゃんそんなことしてたの～? ずるこよ～」

「奈美告つちやいなよ

奈美可愛いしいけるよ～」

ドロシーは3人の会話を聞いて

個室で笑いを殺していた

(結構モテるじゃない 濟ちゃんは女性関係は全くないって言つてたのに)

これで一つからかう事が見つかつた

内心ほくそ笑んでいたドロシーだが

(そういえばこうやって逃げてるのも零のせいだったわね

ちょ

つと遊んじゃおうかな～）

零の居場所を確認して

個室から出て驚いている3人組を尻目に
堂々と零の教室に歩いていった

零の場合

みんなで別れて逃げたあとによく考えてみれば自分はこの学校の生徒だから逃げる必要がないことを思い出した
(トイレに隠れて調子が悪かつた振りでもするか)

そこで一回隠れてから

保健室に行つてアリバイを作つた

(これで完璧～)

鼻歌を歌いながらちょうど授業が終わつたので教室でクラスメイトと話していた

彼はこのあとに悲惨な出来事が起つることをまだ知らなかつた

奈美は放心状態だったが今の会話が聞かれた事がわかると止めに行こうと追いかけたが

その綺麗な人はなぜか自分のクラスに入つていった
(誰に用なのかしら?)

追つてみると驚愕の光景があつた

零はクラスメイトと話しながら違和感を感じていた

(なんか廊下が騒がしいな?)

白銀の眼を使おうとした瞬間

ここにいるはずの奴がいた

「なんでお前が・・・」

言いかけた途端

その人物?が抱きついてきた

「零、会いたかったわ〜」

スタイルはバッグンにいい

気持ちのいい感触がする

その人物とはもちろんドロシーだった

一瞬思考回路が止まつた気がしたが

3秒で立ち直つた

「お前なにしてんだ?」

「大丈夫よ、私はこの学校の生徒のようにみんなは錯覚するようにしたわ」

ここだけ小声で

「そういう問題じゃない」

「なに?」

可愛く首を傾げている

周りからは歓喜とも絶望ともとれる悲鳴が上がつている

さらにこの首を傾げる仕草だ

誇張でもなく倒れる男子が何人か眼に入る

「なんで来た?」

声が低くなるのが自分でもわかる

周りの人間が顔が蒼くなる

普段は温厚な性格で通つてている零がこんな声を出すのは初めてだからだ

「私零に会いたかったの

来たら迷惑だつた?」

また可愛らしく首を傾げた

悲鳴が聞こえる

隣の組からも何人かが来ている

またバサツ と誰かが倒れた

(ダメだ わかつても俺まで卒倒しそう)

自分でそう思うぐらい今の天使は可愛い

元の姿を知っているだけ内心は冷めているが

とりあえずこんな人間破壊天使を教室においておくわけにはいかない

「お前いつまで抱きついているつもりだ？」

「ダメだったの？」

「とりあえず離れる」

「私、零の事いつも思つてているのに」

頭が正常に動かなくなりそうだ

天使を無理矢理離して

また天使の手を引っ張つて屋上の戻る羽目になつた

後ろからついてきていた奈美は教室の光景をみて腰を抜かした

美人と宮西君が抱き合つてている

クラクラと自分が倒れるのがわかつた

「奈美！？しつかりしなさいよ」

美夏ちゃんの声が聞こえたのが最後だった

人間破壊天使の行動の解説

零は天使の右手を引っ張つて屋上へ向かうとした
(なんでこんなことをしなくてはならん)

すると後ろからその原因の張本人が

「痛いわよ 逃げないから離してよ」

まだ他の生徒がいる

目を丸くしている

それと同時になんだか不穏な目線を感じる

(面倒な事になつたな・・・4時間目サボらなきゃいけなくなつた)
関係のないことを考えているといつの間にか
屋上の扉の前に立つた

ドアを開く

同時に天使を放り込んだ

手が赤いかたがついてる

「痛いわね」

「誰のせいかな?」

こういう時の零は怖く感じる

バカな事を言つたりするけど

普段温厚なだけに怒つた時はとても怖い

いや、あなたは・・・

「なあ?なんあんな事したんだ?」

自分でもさつきより落ち着いていくと思つ

結構穏やかな声がでた

ただ気になつていたのはなぜあんな事をしたのかという事だ

まだこの天使と組んで日は浅いが何か事情がない限りあんな真似は

しないはずだ

いくら自分がこの天使とショットチャウフ喧嘩してもそれくらいは自分はこの天使信じている

だからわからなかつたのだ

なぜあんな真似をしたのか

そんな事を考えていると

「あなた、さつき本氣で私に怒らなかつたでしょ？」

確かに疑問には思つたが怒つてはない

「ああ」

「あなた人を好きになつた事ないでしょ？」

「・・・こいつはわかつていてるのか？」

「いや、あるさ」

「嘘よね。あなたは感情を殺している」

「・・・」

沈黙が場を制する

「確かにあなたは付き合つたりしたことはあるかもしね。でもあなたから告白した事はないはず

振られるのが怖い そんな理由じゃなくて「

わかつてたのか・・・

天使が手すりを勧めてくる

天使の隣に並ぶ

肩がくつつきそうになる

空を見上げながら呟く様に

「あなたの過去に何があつたのかは聞かない」

「お前は魔法が使えるだろ?」

自嘲氣味に言い返す

「同調した相手とは魂をよむことは許されない

それにはあなたの魂をよみたくない

あなたを私は信じている

私はあなたを相棒だと思っている

最高のね」

相棒・・・か

魂をよみたくない・・・か

(この天使に俺はよまれてた・・・)

笑いたくなつた

実際笑つていた

隣の天使も笑つていた

おさまたあと

「俺が言いたくなつたらいうよ

「そう・・・」

青い空に月が浮かんでいる

案外自分とこの型破りな天使はいい相棒になりそうだ

私はあなたの魂をよまない

あなたが言いたくなるまで待つ

それが自分なりの

礼儀

だと思つ

「結局なんであんな事をしたんだ?」

ああ忘れるところだつた

零つたら墓穴を掘りだした

顔を見てみると犬の様な顔をしている

いつものクールな顔ではなく

(可愛い)

もう一度抱きしめる

今度は抵抗をしない

ただ体を私に任してくれている

それでもなお聞いてくる

「何でなんだ?」

天使に抱き寄せられた

さつきは動転していたが今は違う

(まあいいか 相棒だし)

冷静になれた

いい香りがする

(なに着けてんだろう?)

どうでもいいことを考えつつ

さつきの続きを聞く

「何でなんだ?」

「それわね~」

「?」

微笑をしたまま爆弾発言をした

「あなたって結構というかかなりモテるじゃない」

「はあ!?」

天使を引き離す

なんでそういう話になるんだ?

問い合わせようといたらいつの間にか扉のところまで歩いていく

「お~、天使・・・」

「自分の心に正直にね!」

捨て台詞同然に言われた

苦笑する

(やつぱりわかってたのかよ)

「あ~、ついでに教室のフォローよろしくね

頑張つてね~」

忘れてたな・・・

しかしながら天使といつもみたいに問い合わせる気にはならなかつた

(仕方ないな)

溜息をつきつつ笑いたい気分だった

結局4時間目はサボつたが
教室に帰つてみると自習だつた
さらに何人もの生徒がいない
首を傾げていると

割りと仲のいい良太が

「教師が何人か倒れてたんだつて
あとはお前のせいだぞ」

先ほどのやり取りを思い出す

(悪いことしたな　あとで見舞いにでも行くか)
教師連中は秋人さんとサミさんだろう
内心大爆笑していたが表情には出さなかつた
すると周りからの視線が痛い

(はて?)

「なあ、さつきの美人の人なんだけど」

軽く聞き流して

「俺、保健室に見舞い行くわ
悪いがめんどくさい」

言い訳もまだ考えてない

(保健室に行くまでに考えとくか)

そう思い歩いて行つた

その頃教室ではいつもはつるさいはずが

今はやけに静まりかえつてゐる

「あいつあんな性格だつたか?」

そう良太が呟いた言葉に
教室全員が心の中で同意した

人間破壊天使の無責任な行動の後始末

説明が面倒くさくなつて教室から脱出して来た零は天使の事をどう扱うかを冷静に考えていた

「まったくめんどくさい事をしてくれたぜ」「やきつつ保健室に向かつていると

何やら視線を感じる

それは好奇心なり憎悪なり羨望などなどいろいろなものがあつた

（はて？なんかしたか？俺は？）

ついさっきの出来事を忘れてしまつていて

これがドロシーにオバケといわれる所以であるがあるがあの問題児（天使）と付き合つていたら

これくらいの神経（団太さ）がいるというのが零の言い分である

保健室はたくさんの人でにぎわつていて

普段こんなにも多くの来場者がいないので（それも一気にだ）

養護教諭こと竹島嬢は

てんてこ舞いの忙しさで働いてる

現在の保健室は零の教室で卒倒した生徒だけを扱つてている教師連中は視聴覚教室で寝かせてある

（それにしてもここまで繁盛したのは過去類にみないのじゃないかしら？）

一通り手当てをして事情聴取なるものを行つていると

今日2回目となる人物が訪れた

「来たわね 保健室過去使用人数最高を記録した原因の張本人め

入った途端に竹島嬢から嫌味を言われた

(えらい言われ様だな)

そうして周りを見回してみると

以外にも人数が少ない

「あれ？結構少ないじゃん」

「野郎は隣の物置に放り込んでるよ」

「悪いね～迷惑かけて」

「本当迷惑～せっかくゆつくりと昼食べようと思つていたのに」

竹島嬢は若く綺麗な・・・といつ典型的な理想の養護教諭といつ事で人気があるが

零とは昔の関係で仲がよい

「それで、彼女誰なの？」

「ははは…」

力のない笑いをする

(姉貴がいたな 失念してた)

「いや？昔の知り合いがこっちに出て来てさあ～」

「私の知る限りあなたの周辺に人を卒倒させる美女はいた記憶がないなあ～」

嫌な笑いをする

面倒くさがりで楽しい事が好きなこの人物は
さつきの事のお返しらしい

「みなねえ美奈姉？」

「ああそういうやいたわね
あの子の事か～」

こういう所は美奈姉のいいところだ
ちゃんと話を合わせてくれる

「美奈姉？」

(こんなにも冷たい声で言われたら同意するしかないじゃない)

零は時と場合に合わせて変幻自在に表情・声を変えてしまつ

(反則よね)

そんなことは表情に出さず

「ねえ零? 何をしにここにきたの?」

「うん? いやお見舞いにきたけどみんなないからいいや」

「女の子が一人いるわよ

「奈美ちゃんだけ? 可愛い子よ」

「奈美・・・? そんな名前の奴いたか?」

ああ奈美ちゃん田が覚めたのね

あとは任せるわよ

「じゃあちよつと用事があるから出るわね

看病してあげなさい」

「ほじよ」

(どうしよう! 2人つきりになっちゃつた)

奈美はちょうど零と竹島先生が話している途中に意識が戻った
何やら最初に話していたようだが良く聞こえなかつた

しかし先生が出て行つた時に意識がはつきりと覚醒した
何やら歩いてくる気配がする

カーテンがめくられる

「悪いね? 田覚ましちゃつた?」

悪いと全然思つてない口調だ

いきなり顔が現れて少し動搖する

「嘉川^{かがわ}って名前、奈美だったのか

知らなかつたな」

「え・・・知らなかつたの?」

「うん? 興味なかつたからな」

さすがに悪いと感じたのか

「いや、お前だけじゃなくみんな知らないよ?」

慌てた様に付け加える

(私にも興味ないんだ・・・)

結構積極的に話したと思うのだが
落胆していると

「ああ、なんか悪かつたな 気絶させちゃって
さつきの美人の事を思い出す

「・・・あの人誰・・・?」

絞り出すような声になつた

あの人誰?

最もな質問をされる

「あいつは幼馴染?」

最後は疑問詞で終わつてしまつた

顔が引きつつていなか心配になる

幸いこの彼女は気づいていないようだ

それより首が千切れるか心配になる程の勢いで顔をあげてくる

「本当?」

「まあな」

いつから自分は平氣で嘘をつけるようになったのかを思い出す
(いつだっけな?なんか嫌だな)

人間破壊天使の無責任な行動の後始末のオマケ

（よかつた・・・）

零はあの綺麗な人とは付き合つていないと
安心した

あの人気が彼女ならば自分がかなうはずがないからだ
喜んで顔をあげた奈美には零の顔が

いつもと違つてひきつていることには気づかなかつた
(これは・・・もしかしてチャンス!?)

ここには零と奈美の2人だけなのだ

これを見逃してはいけない

「あの・・・」

「ふん?」

「私と付き合つてください!」

シンプルになつた

宮西君ならこれぐらいがちょうどいいと思つた

「はい!?」

「私と付き合つてください!」

「はい!?」

いきなり告白された

しかもこの場面で

悠長に嘘が平氣でつけるようになつた時期を思い出してた時に告白だ
対応する暇がない

しかしさすが零と思わせる

(ドロシーが言つてた事はこいつか)
とのんびりとした現実逃避をしていた

「宮西君?」

奈美の声で現実に戻る

しかし零とて少しの現実逃避をしたところでのこの状況が変わるものなく

（美奈姉早く帰つてこい）

念じるも虚しく奈美に催促される

「いや俺、お前のことよく知らないし名前だつて今知つたぐらいだし

「付き合つてからでいいから」「

零自身奈美が別に嫌なのではない

ただ自分に付き合わせてしまつのが嫌なのだと同時に自分の時間を失うのも嫌だ

「俺と付き合わない方がいいと思うよ」

少し声色を変えてみる

正直自分でもするいとわかつていながら

「そ、それでも宮西君がいい」

静寂が場を包む

その時ドロシーから通信がきた

「面白い事になつてゐるじゃない」

「お前知つてたな」

「私知らないなんて一回も言つてないわ」

「悪魔め」

「悪かつたわね いいじゃなに付き合つてなきによ」

「面倒くさい」

「大丈夫よ あなたに付き合つたからとこつて白銀の称号は見えないから

それに私も何もしないわ」

「やられたら困るわ！」

「大丈夫 その子は大丈夫よ」

「本当だな」

「もちろん 今度家に連れて来てね～」

「お前がいるのに連れて帰れるか！」

富西君が黙つて難しい顔をしている

「ねえ？」

「ふん？」

「どうするの？」

「いいんじゃない？」

なぜ疑問系？

突つ込もうか考えていると

（へ？今なんて言つた？いひつて事？）

なにやらこいつちまで思考回路がおかしくなつてしまつたらしい

「今なんて？」

「ふん？いいんじやないつて」

聞く方も聞く方なら

答える方も答える方だ

両方とも上の空で答えている

今奈美は戻つたが

「え！？いいの？」

「うん・・・えつ？」

どうやら富西君も正気に戻つたらしい

ポカンとしていたがそこは攻めされてもひり

「富西君アドレス教えて？」

「ん？ だけ

ど」

「私のはこれね」

「あ、どうも」

なんかぼんやりしてこむらちにこいつのまにかアドレスを教えてしまつたらしい

（電光石火だな）

またまた間抜けな事を考えていると

そこに竹島先生が帰ってきた

「零～そろそろ次の時間ははじまるよ～

わざわざと出でけ～

あ～奈美ちゃん田覚めたの？

なんだか元気そうね～

はい零は出で行つた

(そろそろ時間目という作戦があつたかしまつた)

そんな事を考へてゐうちに保健室を追い出された

人間破壊天使の無責任な行動の後始末のオマケ（後書き）

ちょっと体調崩し気味なので連載期間空くかもしれません
2日に1回ペースを目指します

そういうばなんだか話が変な方向に流れ気味ですが
今後ともよろしくお願いします

日常への帰還

5時間目も案の定自習だつた
(人騒がせな人(天使)だぜ)
自分のことは棚にあげて
3人を罵つている

ちなみに、零は寝ていたが・・・

授業が終わり今日は6時間目がなく部活もなし
さつさと帰れと運がよく攻撃をまぬがれた教師が教室を回っている
部活がしたい奴からはブーイングがおこり
帰りたい奴はさつさと帰る準備に取り掛かる

(さて、どうするかな?帰つて天使を問い合わせるか、いやでもさぼ
れたから感謝すべきか?そういうや秋人さん達どうしたんだろう?)
窓の外を見て考へてると

「富西君 一緒に帰ろ?」

聞き覚えのある声が聞こえる

しかし零には一緒に帰ろうといつ友達は思い浮かばない
(はて?)

振り返ると奈美が立つていた

「なんだ?」

「ええ!」

零からしてみれば当然の疑問だった

なぜ自分が嘉川と一緒に帰らなければいけないのか?

「どうしてお前と俺は帰るんだ?」

「嫌・・・?」

「嫌というか・・・お前地区ビー?」

「已波みなみだけど」

「俺月代さかやだから正反対だな」

「いや、富西君電車でしょ?」

「それが？」

「だから駅まで一緒に・・・」

「そんな距離ないぞ」

「でも・・・」

硬直している奈美をみて居ても立つても居られなくなつたのか

「富西」奈美をいじめるなよ」

「お前は・・・美夏だっけか？」

「そうよ、まだ覚えてないの？」

こいつは無理矢理俺の携帯を取つて

アドレス入れて

変なメールを送つてきて

それで名前を覚えた

まだ正確ではないが

(そんな事より)

「俺がいつ嘉川の事いじめたんだ？」

「今 散々な事言つてたじやない」

「だつて一緒に帰る理由がないだろ」

「あんたたち付き合つたんじょ？」

「あ～忘れてたな

そんな事もあつたな

いつだっけ

「あんた本当にバカ？」

「いや美夏に言われたくないがな」

「そんな事よりもさつさと一緒に帰りなさい」

「俺が誰と帰ろうが勝手だる」

「あの綺麗な人と帰るの？」

「死にたくないなら黙れ」

「・・・」

声色を低くする

零は感情を操作するのが得意だ

本当の感情を持ち合わせていないのでから

表面上だけの感情を操るのは難しくない
だからこいつやつて声で相手を制するのも
いつも簡単にやつてのける

「じゃあまた来週な」

いつもの声で声をかけて

話している間に済ませていた帰る準備をして教室を出て行った

昇降口を出て靴を履き替えていると後ろから
足音が迫つてくる

零は白銀の眼でわかつていただが
あえて無視して帰ることにした

「ねえ・・・はあはあ富西君一緒に帰ろ」
「いつまでもなく嘉川だつた

走つてきたらしく肩を上下させている

「たく、しようがないな」

自販機で買つたジュースを投げてやる

「あつと、・・・？ ありがと」

「汗吹いとけよ」

「うん…」

「このクソ暑いのによく走つたな」「美夏に追いかけるつて言われて」

「そうか…」

それ以降特に会話が続かず

2人黙々と歩く

零は会話がなくとも苦にはならないが
奈美はダメなようだ

何回も話しかけようとするが零の顔をみて辞めるの繰り返しだ

それを察していた零は

(そんなに俺の顔は話しかけにくいか)
変なところでショックを受けていた

駅に着くと

「俺、こっちだから」

「あ、うん またね」

「ほいよ

ホームへ歩いていくと

「富西君！」

振り返ると

「メールしていい？」

溜息を一つつくと

「勝手にじるよ」

電車に乗つてすぐ

「ピロリ～ン」

メールの着信音だ

み見てみると

「はや・・・」

早速奈美からのメールがきていた

日常への回帰？

土曜日・・・零は平和な一日を過ごしていた
特にすることもなく一日中趣味の一つである読書を楽しんでいた
しかしそんな日常も天使にかかるば
速攻で崩れ落ち

「さて？今日は何にしようかしら？」

恐怖のテレビゲームが始まろうとしていた

逃げるのが遅れた零と渚は巻き込まれる羽目になつた

「だいたい天使なあ、ゲームは一人でもできるやつがあるだろ？」「そうですよ」私も暇じゃないんです

「1人でもやっても面白くないわ

それにはあなたたちが学校に行つてゐる間に散々やつてるわよ

「だからってなんで朝10時からなんだよ

もうちよつと寝かせろよ せつかくの休みなのこみ

「あなたは中年のおっさんなの？」

「お前今全国の中年のおっさんを敵にまわしたぞ

全国の中年のおっさんに謝れ」

「あら？私の顔を見て怒る人はいないわ

「うう・・・」

反論が出来ない

メールが来た

（まつたく、朝から誰だよ）

開いてみると奈美からだつた

今日暇なら会わないか？という内容だつた
いつもなら一蹴している零だが

「悪いい天使、今からデートなんだ

悪いが渚とやつてくれ

「兄貴、いつの間に彼女が！？」

「うん？ 昨日だけど

この天使のせいでは

「あら？ 私は感謝されてないの？」

「あんなに迷惑かけるやつに感謝なんかするかよ」

「悪かつたわね だいたい教師連中は秋人とサニさんよ」

「お前が起こした事が一番の問題だらうが」

「兄貴やめろって 天使さんも

2人しかいないですからゲームは今日はなしですね

「いや、やるわよ」

「え・・・」

凍結した渚に謝りつつ零は出かけていった

待合場所は巳波の駅だという

別にゲームさえなればどこでもいいと考えていた零は何も考えずにそこに行つた

しかしそこには予想していた人物とは違う奴がいた

「富西」遅い

なぜか美夏もいた

「ごめんね富西君 美夏が勝手にメール打つて」

そうだったのか

「一応ありがとな 抜け出せたのはありがたい」

「？」

2人が意味のわからない顔をしていたが

「で、何すんだ？」

「そうね、決めてないや

富西がどんな反応をするかみたかっただけだし

「まあ今日はありがたかったけどな」

「なんかあつた？」

「なんかなかつたらこんなとこ来ね～よ」

「酷い」

「面倒くせこやつに捕まりかかったから」

「へえ～誰？」

「で、どいつするよ？」

「ナチュラルにスルーしたね」

とりあえず改札をくぐって駅の前に出る

「ここにいても暑いだけだし

しそうがないから私が奈美の家にいくか」

「美夏ちゃん！？」

零はまつたく表情を変えない

無表情だ

それに気づいたのか美夏が

「あんた仮にも女の子の家に行けるのよ

嬉しそうな顔ぐらいしなさい」

「わーうれしいな」

「棒読みね・・・」

そこに奈美が

「私の家はダメ

今日はお母さんいるの」

「しそうがない 私の家は親いないし行くか」

「いいの？ 美夏ちゃん？」

「いいよ富西誘つたのは私が原因だし
いいよね富西？」

「おう」

「あんた相変わらず無表情ね 私は女の子よ

女の子の家にいけるのよこりと想像しないの？」

「興味ないからな」

「じゃあ奈美の家ならどいつよ？」

「同じく興味なし」

傷ついた顔を隣でする

「あ～でもな」

「何？ 富西？」

「うん？ いや自分で女の子だつて言い張る奴がもう一人いたなあ～
と思って」

「ふ～ん」

そんな不毛な会話をしつつ美夏の家に向かう
「そういや酒井（美夏）は巳波だつたのか？」
「そうね～それで奈美と親しくなつたし」

「ふ～ん」

「何よ ？」 興味あるの

「ない」

「即答ね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6437z/>

天使憑き

2012年1月13日18時52分発行